

生徒会役員共 一桜才学
園生徒会補佐・不知火
リントの日常一

明智ワクナリ

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

桜才学園に入学した不知火リントと津田タカトシ。

初日から全力疾走で登校した彼らを待っていたのは、桜才学園を代表する生徒会の才女たちだった。

桜才学園生徒会会則、第1条第0項

『SSで抜けるのは読み手が上級者なのか、それとも書き手が上級者なのか?』

シノ「なあ津田、不知火。この会則の答えはどっちだと思う?私はだな」

タカトシ「か、会長!あらすじでなんてもの出してるんですか!?!消してください今す

ぐに！」

シノ「え、なんで。………ハッ！もしかして津田、お前はSSで抜け——」

タカトシ「なーい。全然なーい」

リント「はあ………やっぱりこうなるんだな」

※本作品は台本形式ではありません。あらすじだけの特別バージョンでお送りしています。

※ヒロインはタグ通り未定です。決定はしていますがそれを出すかどうかは、今後の展開次第でやっていきたいと思えます。

目次

第1条 『桜と才女と二人組』	1
第2条 『♪生徒会の愉快な学校案内♪』	20

第1条 『桜と才女と二人組』

新しい日常に心を躍らせるのは必然だと俺は思っている。

幼稚園の遠足や小・中学生の修学旅行、その前日というのは決まって寝付けないものだ。いわゆる気持ちが高ぶって脳が興奮状態になるという現象だが、それはみんなも経験したことはあるだろう？

そして俺は昨日そのハイな状態に陥ってしまい——

「い、急げタカトシ！遅刻だ遅刻!!」

「分かっているけど朝からキツイよこれ！」

高校登校初日にして遅刻しそうになっていた。

ここから約20分程度で高校に着くとはいえ急がなければ確実に遅刻コース確定。入学早々に遅刻をやらかすなど言語道断、問題児というレッテルを貼られかねない危険な状態だ。

……………くつ、そんな事態だけは絶対に回避しなくては!!

赤信号を歩道橋で華麗にパスし歩道を独走、そして正門に滑り込みセーフ。朝から全力疾走というハードなランニングで体を温めた俺たちはその場で息を整える。

「いやー危なかった危なかった」

「ホント危なかった。それにしても珍しいよね、リントが寝坊するなんて」

手でシャツの中に風を送る俺の隣で津田タカトシは不思議そうに首を傾げていた。

が、その疑問は確かに問いかけられて当然だ。俺は遅刻というモノをしたことがないし、寝坊だつてしなかった。ちなみにそれを知っているのはタカトシが中学からの同級生だからだ。

そんな俺が高校に入学して間もないこの時期に寝坊するとはまず考えられない。タカトシはそれを疑問に思ったのだろう。故に俺には答える義務がある。つまりそれは

「目覚ましかけ忘れた」

「あつれ、最初の前置きと全然違うじゃん」

「ほら、一応4月ってエイプリルフルだし、1ヶ月通して嘘つき放題って俺の中で決めるから」

「うわーちよーメンドくさ」

とりあえずどうしようもなく普通の理由だったということだ。



私立桜才学園。

今年の春から通うことになった俺の新しい母校の名だ。

さすが元女子校というだけあってやはり女子の姿は多い。ぎつと見ても俺とタカトシくらいしか男子が見当たらない。

それもそうか、なにせ女子の人数が3桁に対して男子は2桁しかいないんだから。同性が少ないつてのもなんだか寂しいよなあ。

ならば何故そんな学校を選んだのか!?!と聞かれれば単に家から近かった、という夢も希望もなく面倒臭がり屋な性格が表面に出たのが理由だ。

だって徒歩で20分だよ。普通なら自転車で駅まで向かって電車で揺られながら通学、つていう非常に面倒臭いことしなくていいし、ノーマネーでついでに健康にも良いんだから一石二鳥じゃん。

まあ、とりあえず言いたいことはハーレム望んできたわけじゃねえ、つてことです。

「それにしても暑いな」

「そりやそうだよ、朝からあれだけ走れば」

朝っぱらから汗だくで登校とはまた最悪だ。だがその代わりとして遅刻がナシになったと思えば安いものだろう。

とりあえずネクタイを緩めて中に風を——と、タカトシと二人揃ってネクタイを緩めていた時だった。

「（こら）その男子二人っ！ネクタイが緩んでいるぞ！」

凜とした声が俺たちを呼び止めた。

何事かと後ろを振り向くと、そこには腰まで届く綺麗な黒髪の女子が俺たち二人に指をさしているではないか。

腕には腕章、つまり朝の制服検査に捕まってしまったということだった。

……………くっ、ここでやったのは逆に迂闊だったか。

「すみません、走って来たものでつい……………」

「そうか。まあ、確かに4月の陽気で走って来れば暑いだろうな。事情はわかった。だが規則は規則だ、なあなあにしてしまっっては示しがつかんのでな」

「すみません」

俺とタカトシは素直に謝ることにした。厳しいには厳しいがこの人の言うことは最もだ。事あるごとに特例を出しているなら周りに示しがつかない。

品行方正という言葉が似合うであろうその人は、優しげに微笑みながら俺たちに近づいてくる。

「どれ、私がネクタイを直してやろう」

「そんな、悪いですよ。そのくらい自分で出来ますから」

「遠慮するな、私とて注意するだけの規則の鬼ではあるまい」

「……………は、はあ。それじゃあお願い——」

「だが校則違反に対する罰則は別だ」

「グエツ!!」

鬼がいた。

タカトシのネクタイを締めるついでに首を絞めるとは、必殺仕事人も驚きの手際の良
さだ。

——この人、出来る!!

「さて、次はそっちの番だ」

ぐったりとするタカトシをボロ雑巾のように捨てると、その瞳を俺の方へと向けてき
た。

ど、どうする!?!ここは戦力的に撤退するべきか!?!けど、それじゃあ犠牲になったタカ
トシは何にも報われねえじゃねえか!!

「——ふっ」

「ほう、今の光景を見ても逃げ出さんとは、中々肝の据わった男と見受ける」

「いや、そんな大層な男じゃないさ。でも——」

「でも？」

「男には逃げられない戦いもあるんだぜ」

「いい覚悟だ。では罰則を受けるがいい！」

そして鬼は俺に微笑んだ。

◇

「つてなに、この茶番劇」

校則違反の制裁を受けている俺を横目にタカトシは半眼でその光景を見ていた。

茶番とは何だ茶番とは！折角盛り上げてやったというのに！

と、そこで女子生徒さんはようやく手を放してくれた。

「ふう、これで君たちも少しは反省したか？」

「スママセンでした」

「まあ一応は「もう一度制裁を加えようか？」いやー校則の重みが骨身に染みましたよ姐

さんー」

「そうかそうか」

満足そうに頷く女子生徒さん。よく見るとこの人は風紀委員ではなく生徒会の人

だったらしい。腕章には生徒会会長と記されている。こんな朝からきっちり仕事をこなすなんて見た目通りの真面目な人なんだなあ。

「でもこういう検査って結局目につかないところだと元に戻っちゃうんですよね」

「そうか、ではそうならないようにもっときつく締めてやる」

「グオツ!？」

自業自得でさらに首を締め上げられるタカトシ。相変わらず余計なひと言を言う性格だけは変わってないみたいだな。

お、自力で抜け出せたか。

「……………し、死ぬかと思った」

「今回はお前の勝手な自爆だな。おつかれさん」

「すまないな、これも規則を守ってもらうための行為だ。きちんとした服装で臨めば勉強も捗るだろう? なにより——」

「なにより?」

「しまりの悪い女だと思われたくないからな!」

「……………は?」

急に何を出だすんだこの人は。

何を言いたかったのかは分からないが、言い切ったと言わんばかりに清々しい顔で胸

を張っている。

と、そんな光景を二人して『?』を浮かべたまま見ている時だった。

「なによアンタたち、朝から締まりのない顔してるわね。もつとこうシャキツとしたらどうなの?」

背中の方から声をかけられた。

俺の背後を取るとは何奴!? という冗談はさておき後ろの方を向いてみるも。

「あれ? 誰も居ない?」

俺の視界には誰の姿も映ってはいない。おかしいな、今確かに声が聞こえたんだけど、もしかして空耳だったのか? いや、それにしても随分とちゃんとした言葉だったけど……………ハッ!こ、これはまさか。

「怪談話に出てくる幽霊さんに話しかけられたのか!」

「ここに居るわボケエ!」

「どわああっ!」

突如として前方から怨念の塊のような声が発生し、視界の下から靴がすつ飛んできた。俺は間一髪でそれを躲けてみせ、素早く体勢を立て直す。そして視界を下の方へ向けてみると。

「今の嫌味か!? 身長が足りないあたしへの嫌味か!? どうかって聞いてんだよ答えろゴル

アアアアアアアアアアアアアツ!!!」

ちっちゃな女の子が金髪のツインテールをフワフワ揺らして地団太踏みながらもすっごい勢いで呪詛を撒き散らしまくっていた。怒りのせいか顔は真っ赤でどことなく可愛らしいが、口から出ているのはうら若き乙女が出してはいけない完全NGな声だ。

「ちよ、なにこの子!? 凄い怒ってるんだけど!」

突如として起こったアクシデントにタカトシも仰天していた。かくいう俺もかなり驚いているが、まずは事態の收拾をしなくては。

「えっと、あ、あのこのお子さんは誰かの妹さんですか?」

「があああああ! キサマ! 言ってはならないことを口にしたなあ!! 死ねえ!!」

怒りを通り越して憤怒の形相を浮かべたツインテール少女は片足を軸に回転し、見事な平衡感覚でその回転を維持したまま、もう片方の靴を俺に向けて発射した。

ドリルのように見事な螺旋を描いて襲い来る靴。

だがしかし!

「二度も同じ手を通ると思ったら大間違いだぜ!」

そう、この攻撃は先のやりとりで既に見抜いている。俺は体を逸らすことで軌道上から逃れることに成功し、

「グハッ!？」

代わりにその靴が俺の後ろに居たタカトシの顔面にクリーンヒットした。

俺はそこで転げ落ちている靴を拾い、裸足ニーソとなつてしまったツインテール少女に渡す。

「ほらよ靴。なかなかいいシュート打ってくるじゃん」

「ん、ありがと。今の躲すなんてアンタもやるわね」

靴を手渡し俺はツインテール少女と固い握手を交わした。そこには悪意などなく、代わりにあつたのは芽生えた友情と互いを称え合う笑顔だった。



「いやさつきから言ってるけど何なのこの茶番は?」

とりあえずツインテール少女と仲直りしたところで、またしてもタカトシが半眼でこつちを見ていた。

もう、わかつてないなあタカトシ君。ノリだよノリ。

「えーと、なんか大事になっちゃったけど。私は萩村スズ、アンタたちと同じ1年生よ」と、紹介してくれたツインテール幼女——もとい萩村スズはそのまま指を立てて続

けた。

「ちなみに私はIQ180の帰国子女で、もちろん海外で生活してたから英語はペラペラ、10桁の暗算だって朝飯前だし、その才能を買われて1年生という立場ながら生徒会の会計職まで任されてるの。だから私のこと子供だと思ってる痛い目見るわよ」

捲し立てるように言い切った萩村はフッフッフ、と誇らしげに手を腰に当ててえげつている。

というより、今のセリフでどこに痛い目を見る要素があつたのだろうか？『どう、私凄いでしょー。悔しいでしょー』的なオーラが出てるけど俺には子供が自慢してるようにしか見えない。ちなみにタカトシも同じような目で見守っている。

と、そこで萩村に会長さんが水を差した。

「でも9時には眠くなるんだ」

「子供だ………！」

「うわーん！コンニャローコンチキショー！」

と泣きながら俺とタカトシを交互にボカスカと殴るが、さして痛くもなく駄々をこねる子供を見るような温かい目で見守ることにした。

「こくら2人とも、新入生を困らせたりしちゃ駄目よ」

と、本日3人目となるお方が声をかけてきた。

「なんだ、アリアか」

慣れ親しんだように声をかける会長さん。

お嬢様のような気品を兼ね備えた上品な人だ。ふんわりとした長い髪と大きな二つの膨らみを持つその人の腕にはやはり生徒会の腕章がついている。

「ごめんなさいね、足止めしちゃって」

「い、いえ、そんな。ありがとうございます」

「あらあら、別にお礼なんていいのに」

謙遜するように微笑む美人さん。見た感じいいところのお嬢様っぽいし、会長さんとはまた違った綺麗な人だなあ。俺もタカトシに習ってお礼を言うておくことにしよう。

「ありがとうございます、助けに来て頂いて」

俺がお礼を言うと美人さんはうんうんと嬉しそうに頷いて。

「いいのよ。その木の陰から面白いもの見させてもらってたから」

「ヤツベ、何も助かないや〜」

とんでもない爆弾を落としやがった。そしてすかさずタカトシがツツコミ、流石だぜ我が友よ！

と、美人さんは悩ましげな顔とポーズでさらに続けた。

「でも残念、携帯で動画を撮ろうしたら容量が一杯だったのよね。あとでじっくり鑑賞

しようと思ったのに」

「余計にタチ悪いなおい！」

、前言は撤回させてもらおう、この人も大概おかしいわ。

するとそこで今度は会長さんが話になだれ込んで来た。なんとなく嫌な予感がする。

「なんだとアリア。この前データを整理して容量を増やしたんじゃないのか？」

「そうなんだけどね。ちよつと色々あつて」

「ま、まさかまた迷惑メールか？ 気をつけろとあれだけ注意していたのに」

「ううん、違うのよシノちゃん。男の人の仕組みについて調べてたら画像資料で一杯になつちやつたの」

「なくんだ、それなら仕方ないなあ」

（……………どこが仕方ないんだらうか……………）

女子校つてこうもつと清楚な感じじゃなかったっけ。もしかして俺の想像つて時代遅れの産物だったのかなあ。目の前でキヤツキヤツウフフしてる人たちを見るとそう思えてくる。

そこで美人さんが思い出したように俺たちへと声をかけてきた。

「そういうえばなんで2人はこの学校に入学したの？」

「単に家が近かった、つてというのが理由ですな」

「俺も同じく。電車で通学とか面倒だったんでこっちにしましたですよ」

と、ここで会長さんが過敏な反応を見せてきた。

「な、なんだと!? 朝のラツシユアワーでJKと密着、そして○漢から始まるラブストーリーを起こす場を自ら捨てたというのか!？」

「そんな汚れたラブストーリーなんていらねえわ! 電車を何だと思ってるんだ! つかいい加減、話の腰折るのやめてもらえませんかね!!」

電車内をコンパ会場と勘違いしてるんじゃないのかこの人。というより色々ダメだろ、法に裁かれるぞ。

「そうなんだく、2人とも真面目なのね。てつきり私はハーレム要因を求めて来る男の子ばっかりだと思つて」

「あー、そりやあないですね」

「なるほど、ハーレム要因か。酒池肉林、奴隷に調教に飼育。男の子は多感だな!」
「そこまで酷くないし多感なのはアンタだ」

と会長さんの暴走にタカトシが半眼でジャブを食らわせた。話の腰を折るじゃなくて言葉の意味を折ってくるんだなこの人。非常にめんどくさい人だ。

「とりあえずそこまで心配するようなヤツは居ないと思いますよ」

「そう、でも……もしそういう人がいたら可哀想ね」

「え、可哀想？」

突然、顔を曇らせる美人さん。どうしたんだろう、何かまずいことでも言ったんだらうか？

「無駄なのよ。ここにいる娘たちはみんな女の子にしか興味がないから」

どーしよー、男子よりこの学校に通ってる女子の方が心配になって来たー。

「おほん、すまないな。彼女は重いジョークが好きなんだ。ちなみに私はノーマルだぞ」
スズヘッド←「私も同じく」

異議を唱えるように挙手して2人が答える。うん、この人たちは心配ないな。ということはこの美人さんも「女の子同士っていうのも意外といいかも」彼女の今後の行く末が僕はとつても心配です。

——キーン、コーン、カーン、コーン

おつ、鐘が鳴ったか。そろそろ教室に行かないと。……………つてあれ、確かこの鐘つてHRが始まる時間のヤツじゃあ。

慌てて校舎の時計を見てみると。

「結局遅刻しちゃったよー!!」

「あれだけ全力疾走してきたのに……………」

「ああ、すまなかったな。私たちのせいで遅刻させてしまったか。お詫びと言っては何

だが、生徒会に君たちを迎えよう」

「「ええっ!?!」」

俺とタカトシ、萩村の声が大きく響く。

え? なんなんですかこの展開。話に脈絡がないにも程があるでしょうが。

そして最初に口を開いたのは萩村だった。

「会長!?!、こいつらを生徒会に入れるんですか!?!」

「そうだ。前々から思っではいたのだが、今年から桜才学園も共学化となつて男子が入学した。今までは我々の常識でこの学校を取り仕切ってきたが今後はそうもいかない。そこで私は考えたんだが、生徒会に何人かの男子が役員として入ってもらふことで、男子の意見などをこの学校に取り入れていこうと思うんだ。それだけじゃなく純粋に男子もこの学校の一員として迎え入れる、というのも込みでだな」

「そ、それは確かにそうですけど、男子ってなんだか不衛生っぽくて汗臭そうだし。それに暴力的な人もたくさんいるって聞いてますし」

「偏見だよー男子も清潔だし安全だよー」

必死にイメージを取り繕うとするタカトシ。

つか俺ら男子って女子校だと汚物か獣並の認識しかされてないわけ?

「大丈夫よスズちゃん。この2人は真面目そうだし、それになんだかんだでこっちの彼

とはちよつといい感じだったじゃない」

と、俺の方を指さす美人さん。一方萩村は顔をトマトみたいにして反論する。

「ち、違いますよ!? アレはなんていうか場の雰囲気に合わせてみたっていうか、とにかくそういう感じだけで他意はありませんよ!」

そんな必死に否定する萩村を見て美人さんは俺に微笑みかける。どうやら俺たちのことをフォローしてくれたらしい。なんだかんだで実はいい人なのかもしれないな。

「まあ生徒会室がイ○臭くなるかもしれないけどね☆」

「なりませんよ☆」

もはや本能的に反応してしまう俺。

……………結局フォローになってねえし。やっぱり信用する人間は選んどくか。

「とにかくそういうことだ。とりあえず自己紹介からさせてもらおう。私は2年の生徒会長、天草シノだ」

「同じく2年、書記の七条アリアです。2人ともよろしくね」

「さつきも言ったけどアンタたちと同じ1年、会計の萩村スズよ」

と順番に自己紹介をしてくれた生徒会メンバー。そのままの流れで俺たちも自己紹介することになった。

「えと、1年の津田タカトシです。よろしくお願いします」

「俺も同じく1年の不知火リントです。不束者ですがよろしくです」

「よし、では津田には私が元居た席、副会長の座を進呈しようじゃないか」

「ええ!?!待ってくださいよ、入学初日から副会長なんて無理ですって」

「いや君ならきつとできるさ。私が言うのだから間違いない。胸を張って私の右手として頑張つてほしい」

「あれ、普通この場合つて右腕じゃないんですか?」

会長である天草先輩に素朴な質問をぶつけてみた。が、俺はそれを後悔する。

「右手じゃある意味恋人よね」

「はーん、そういう意味でしたか。美人さん改め七条先輩の言葉に俺はがっくりと項垂れた。」

そこで天草先輩が俺に指をさす。

「そして君には生徒会補佐として生徒会のサポートを行つてもらおう」

スズヘッド←「え、でもそんな役職ないですよ会長」

「えくないの。じゃあ作ろう!」

おい、それでいいのか桜才学園生徒会。

「というわけで今日から君たちは我々生徒会の一員だ。この桜才学園をより良い学校に、そして生徒たちを開発するために頑張ろうではないか!」

「はーい、そこ開発とか言わなーい」

いい感じに締めくくられると思いきや結局最後にタカトシのツツコミで幕を閉じた。これが俺——生徒会補佐・不知火リントの日常の始まりだった。

第2条 『♪生徒会の愉快な学校案内♪』

ここ私立桜才学園に俺とタカトシが入学して2日目を迎えた。

高校生になったら何かが変わるのか、という中学時代の素朴な疑問に答えるならば、それはイエスでありノーだ。

生活環境は随分と変わった。

というのも今年から共学化した元女子校に入学すれば嫌でも感じることである。だが学校という場所はやはりどこも同じようで、授業のレベルが上がった程度で他には特に変わりが見受けられない。まあ校内は男子にとって不便なところは多々あるものの、結局のところは中学時代とさほど違いは感じなかった。これも中学からの同級生であるタカトシが居る、というのが原因の一つなんだろうが。

だがそれとは違う変化もあった。

登校初日から俺たちを捕まえ、そして遅刻の要因となった3人の才女。2年、天草シノ先輩。同じく2年、七条アリア先輩。そして俺たちと同学年の萩村スズ。この3人との出会いで俺たちの変わり映えのしない学校生活に変化を与えてくれた。

それが良いことだったか悪いことだったかは判断できないが、一応の変化があったこ

とに間違いない。

そしてこれがイエスでありノーである理由だ。

津田タカトシは1年の上、昨日入学したばかりの新参者でありながら副会長職を任され、俺、不知火リントもまた生徒会補佐というありもしない職を強引に作り上げて任された次第だ。

……強引にもほどがあるぜ、桜才学園生徒会。



桜才学園生徒会会長様の強引なご命令で生徒会職に任命されたわけだが、昨日は入学初日ということもあって『活動は明日からだ!』という理由で解散した。

というわけで俺たち2人は他3名を加えて現在生徒会室に集合している。

大きな机に5人。まず廊下側に座る俺と七条先輩、俺の正面に座るのは背が一個分抜けているようにしか見えない萩村、その隣にはタカトシ、そして真ん中に当たる部分には会長こと天草先輩が座っている。

当初の予定なら廊下側に俺とタカトシ、という席順で座る筈だったのだが『君は私の右手——もとい右腕なんだから右に座れ!』というわけのわからない会長命令でこ

うなつた。

「というわけで今年度第一回生徒会会議を始める——と言いたいところだが今日は取り止めようと思う」

「えっ？ 今日って大事な会議だったんじゃない」

会議の開始宣言をしておきながらやっぱりやめる、という会長のフエイントにタカトシが間抜けな声を出した。タカトシの言う通り、今日は大事な会議があるから必ず来るようにと会長自ら言っていたのだが、一体どうしたんだらうか？

「いや、君たちがこの学校に入学してまだ2日目だということをすっかり忘れていてな。今回の遅刻は我々の不手際でもあるから、今日は学校の案内をしようと思うんだ」

そう、実を言うと俺たちは今日の会議に少し遅刻した。理由はとても言い訳がましいのだが、俺たちは二人して道に迷っていたのだ。なにしろ入学2日目なわけだし、そもそも生徒会に入るなんて考えても居なかったのだから道順が分からなかったのは当然である。

だからといってそれを正当化させようと思うほど子供ではない。それはタカトシも同じだったようで手を振りながら断ろうとした。

「いい、いいですよ。元を辿れば昨日の内に確かめなかったのがいけなかったんですから。それに今日は大事な会議があるって」

「なに、気にする必要はないさ。会議なんかより君たちがまずこの学校に慣れてもらう方が先決だ。そうすれば会議での話し合いも広がるだろう?」

「そう、ですね。スミマセン、俺たちの為に」

断るのも悪い気がした俺たちは会長の好意に甘えることにした。確かに会長の言う通り、この学校のことを知らずに話し合いをしたところでもろくな意見が出ないだろう。少しでも色んなところに触れていけば今後の役に立つ。流星は生徒会長、考えることが俺たちとは違うな。

「では、そうしよう。何事も知ることから始めるのが基本だ。知ると知らないでは大いに違うからな」

「じゃあ今日は課外活動ね、ちよつとワクワクしちゃうな♪」

「よろしくお願いします」

こうして俺たちの初生徒会活動は「学校案内」から始まるのだった。

だが、意気揚々と先頭を歩く会長の後姿を見て俺たちふとは考える。

この選択は果たして正解だったのだろうか。



結果から言うとそれは悪い意味での大正解だった。

「ここが保健室だ。怪我をした時、体調が悪くなった時に立ち寄ると良い」
なるほど保健室か。確かに学校生活を送る上で一応は知っておかなきゃいけない場所だな。

と、ここで七条先輩がワンポイントアドバイスをくれた。

「あとムラムラした時にも来ると良いよ〜」

非常にいらぬアドバイスだ。

「そうだったな、そのことを伝え忘れていた。ナイスフォローだアリア」

「バッドフォローだよコノヤロウ」

保健室前で早速暴走する2人にすかさずタカトシのツツコミが炸裂する。

☆移動中☆

「ここが女子更衣室。体育前なんか私たちが使ってるんだよ〜」

「は、はあ……………」

女子更衣室に案内されても別に俺たちが使用するわけじゃないんだけどな。まったく、どう反応していいかわからないじゃないかっ。

「ちなみに隣の部屋には穴が開いていて、そこからちようど中が覗ける仕組みになっている。ナニかをしたくなったらここに来ると良い。いわゆるナニポジション、というやつだな」

「しませんよーナニもしませんからねー」

こつちもすかさず会長にアタック！

なんだよナニポジションって、初めて聞いたぞ。というよりその覗き穴は早々に埋めなさい！

☆また移動中☆

「そしてここが使われていない無人の教室だ」

「使われていない教室なんぞを紹介してどうするつもりなんだろうか？男子の更衣室代わりっていうには少し遠すぎる気もするが……………」

「床を使うもよし、机を並べてその上を使うもよし、窓辺を使うのもスリルがあつていいぞ」

「どういう使い道!?!なにがスリルなんだろう!?!」

なんとか会長の暴走を止めようと俺が必死でブレーキをかけるも、隣から新たな暴走

列車が現れてしまった。

「使う予定がないから少しぐらい汚してもバレない所がおススメなの。人通りもほとんどないから気兼ねなく集中できるしね☆」

「家か図書室で集中するんで大丈夫です」

「おいタカトシ！その返答は——」

「なに!?津田はバレるかバレないかの瀬戸際でするのが趣味なのか!?!」

「しまったあつ!!?」

くっ………!間に合わなかったか………!!

☆またまた移動中☆

「ここが体育倉庫だ!」

「へー」

「む?」

俺たちの無関心な反応に会長はすこし眉をひそめて、思案するようなポーズを取りながら俺たちに顔を向ける。

「むう、男子が見てドキツとしそうな場所を優先的に紹介していたのだが、何か間違っ

いただろうか」

「うん、そりやもう」

「答え云々より問題文が間違ってるレベルだな」

一応に頷く俺たち。そんな俺たちを見て考えを改めたのか会長はよし、と気合を入れた。

「うむ、君たちの希望はよくわかった。次に案内するところは普通の場所にするとう」

その姿に俺たちは疑いの眼差しを向けるのだった。

☆またまたまた移動中☆

「ここが音楽室だ」

案内されたのは大きなグランドピアノが中心に置かれた広々とした空間の音楽室だった。

様々な楽器が取り揃えられていて、中には見たことのない楽器まで置いてある。全体的に明るいイメージの空間だな。

流石に自重してくれたそうで、至って普通の説明をしてくれた。

と、安堵していた矢先――

「ここでのおススメはグラランドピアノの上だ。あそこが一番の使いどころだな！」

「シノちゃん、ドラムのスティックで遊ぶっていう方法も忘れちゃだめだよ」

「おお、そうだったな」

「結局、続くのかよ」

相変わらずろくでもないことしか言わない先輩方に脱力しきって俺たちは一様に項垂れた。

(この人たちの相手、マジでハンパなく疲れるわー)

☆またまたまた移動中☆

「ここが私とシノちゃんの教室なの。もし困ったこととかあったら、遠慮せずに相談してね」

と、2―Bと表記された教室を指さす七条先輩。

「ありがとうございます。何かあったらその時はよろしくお願いしますね」

なにかあった時の為に覚えておくか。この情報は知ってて損することじゃなさそうだし。

と、ここで七条先輩が感慨深く教室を見ながら口を開いた。

「今思ったんだけど、少子化っていうのも案外悪くないのかもしれないわね」

「え？」

急に何を言い出すんだろうかこの人は。

でも少子化って良いことか？少子化のせいで共学にまで追い込まれたっていうのに。………もしかして七条先輩のことだから「少子化のおかげで保健体育の授業がはかどりそうなのよね」とかっていうつもりなんじゃあ——

「だって、3年生になってP組まであったら色々大変そうじゃない？」

「クラスのイメージカラーは間違いなくピンクだな！これはきつと不動だ！」

「だねー」

そっちかーいっ！………ってこれはツツコむべきなんだろうかと、どうするべきなんだ!?

☆またまたまたまたまた移動中☆

「ここが女子専用トイレだ。男子は下の教員用を使うようにするんだぞ」

「は、はい」

ここに連れて来てこの人は本当に何がしたいんだ？女子更衣室以上に俺たちには無縁の場所だと思うんだが……………。

「いいか、ここでは用を足す以外にナ○キンを装着したりする」

「あれー？質問してないのに答えが出てきたー」

ホントに勘弁してほしい。会長とタカトシのやり取りで頭痛が起きそうな俺の隣から、今度は七条先輩が会話になだれ込んで来た。

「ちよつとシノちゃん！私はタン○ン派よ!!」

そんな自己主張は必要ないと思う。

「すまない。自分を基準に語るのは悪い癖だったな」

「ほんとだよ。まったくダメだよシノちゃん、みんながみんなナ○キン派じゃないんだから。それじゃあ他の人に誤解されて——」

なにをどう誤解されるのだろうか？

なんだかこの2人というと頭痛を通り越してフラフラしてくるな。

「ねえ、リント。これいつまで続くのかな」

「さあな、耐えることしか俺たちにはできないぜ。それにしても萩村はよく平気でいられるな」

スズヘッド←「私はもう慣れた」

その一言が今日一番の心強い言葉だったのかもしれない。

☆またまたまたまたまたまた移動中の事☆

「会長、お疲れ様です」

「ああ、ありがとう」

廊下を歩いているとすれ違う度に生徒たちが会長に声をかけていく。それに対して返事をする会長の姿は、やはり桜才学園生徒会会長に相応しい姿である。

「流石は会長。生徒のみんなに挨拶されるなんて、人望が厚いんですね」

「いやなに。生徒の代表として、そしてこの学園の代表として自覚ある行動をしていたら、偶然彼女たちが慕ってくれるようになっただけの話だ。そこまで褒められたようなモノじゃないさ」

「そんな謙遜しなくてもいいじゃないですか。俺はそういうの結構すげーなって思いますけど」

「そ、そうか。そう言われるとなんだか照れくさいな。まあ君たちも生徒に慕われるような立派な生徒会役員になってくれ」

「あ、いや。俺はそういうの苦手っていうか……………」

「なんだ、もしかして津田は蔑まれる方がいいのか？Mの気でもあるのか？」
「会長、発想が極端なのはよくないと思います」

☆またまたまたまたまたまた移動中☆

「ここが屋上よ。ウチの学校は生徒の立入も許可してるの」

と今度は萩村が屋上を紹介してくれた。俺たちはその後を追っていく。

「私、高い所好きなのよね」

「なんで？」

呟くような言葉を聞いて俺は何気なく聞き返した。

「他の奴らを見下ろせるから」

そこに光は灯つていかなかった。まるで「見ろ！人がゴミのようだあ!!」と言わんばかりの冷たい目で下にいる生徒たちを見下ろしている。うん、コンプレックスは時として人を鬼に変えるんだね。

そんなことを思いながら萩村を見ていると、誤魔化すように説明を再開した。

「そうそう、ここでは昼食を摂ったりお昼寝したり、まあ色々なことが出来るわ」

「そうそう、色々なことが出来るのよ」

と、またしても七条先輩が意味深な発言をしながら現れた……………つて。

「あの、会長」

「な、なんだね不知火くん。わ、私に用があるのかい？」

「いや、別に用っていうほど用はないんですけど……………」

俺の視線の先では会長が七条先輩の腰にびったりくっついていた。顔は真っ青、声も震えてさつきまでの鋭い切り返しも弱々しいものとなっている。

あ……………これってつまり。

「会長つて、もしかして高所恐怖症ですか？」

「な、なにを言うんだねチミは！わわわ、私は決して怖くなど、怖くなどないもん！」

「でも脚の震え方がすごいですよ」

みれば会長の脚は生まれたての小鹿のように震えていて、その足取りも非常におぼつかない。

「ば、馬鹿者！これはだな、楽しすぎて脚が笑っているのさ!!」

うまいこと言ったつもりだろうけど全然うまくないぞー。

☆また（もうめんどくせえから以下省略）移動中☆

「さあ2人も、ここが校庭だ！」

屋上とは打って変わって大はしゃぎしている会長。どうやらさっきのイメージを払拭するべく、俺たちにいいところを見せようとしているらしい。

「どうだ、きちんと整備されているだろう」

会長の自慢げな言葉に俺たちは頷く。

芝生は丁寧に切り揃えられ、花壇の花も生き生きと咲いているように感じる。手入れは行き届いてるようでどこを見ても綺麗だ。公園でもなかなかお目にかかれないところである。

等間隔で植えられた桜が色鮮やかな色彩で校庭を彩る中、俺はふと会長に視線を移した。

綺麗だった。

一言で表すならそれ以外の言葉は該当しない。

爽やかな春の風が吹く中、桜と一緒に髪をなびかせる会長の姿はとても綺麗だ。口を開くとかなりアレだが、こうして見る会長は大和撫子がとてもし合う美人だった。

「ん？どうした不知火？」

「え？あ、いや」

横顔が凄く綺麗だったのでつい見惚れてましたー、なんてことを言えるはずもなく、

視線を明後日の方向に向けて口籠もってしまう。それがいけなかったのかもかもしれない。

「む？もしや不知火」

「な、何でもありません。ただ——」

「私の下がきちんと整備されてないと思ってるのか!？」

「今の感動返してくれよマジで」

「……………期待した俺が馬鹿だった。いや別にこの人たちに期待なんてしてないぞ。し、してないんだからね！」

と、その時だった。

「きゃあっ!」

突然校庭に強い風が吹いた。桜が嵐の如く舞い上がり俺の顔にダイレクトアタックを仕掛けてくる。

そのおかげで前は何も見えなかったわけだが。

顔面に張り付く桜を振り払うと、顔を赤くしている萩村の姿が目に入った。

「……………見た？」

スカートの裾を押さえながら俯きがちで俺の方を見上げる萩村。その姿に不覚にもドキツとしてしまった俺は頭を掻きつつ答えた。

「い、いや、見てないぞ」

「ほ、ほんとに?」

「ああ見てない」

ちよつと見たかつた気もするけど。つといかんいかん!

気分を入れ替えるためにタカトシの方へ視線を移してみる。するとあつちでも同様の会話が聞こえてきた。

「津田くん、スカートの中見た?」

「い、いえ見てませんよ」

「まったく、何だ今の風は。人の体を弄まさぐるように撫でまわした挙句、スカートの中身まで見ようとはけしからん風だ!」

「うんうん会長がけしからん」

訂正しよう、地獄絵図が広がっていた。

タカトシは相変わらずブレない会長にツツコミを入れた後、独り言のように呟く。

「それにしても女子ってこういう時大変ですよね」

「ん、そうだね。大体の人は短パンとかを穿いてカモフラージュしているんだけど、ウチの学校はその制度を一切禁止してるのよ」

「え?なんでですか?」

七条先輩に対して無防備な質問をするタカトシ。そして回答者はまさかの会長だつ

た。

「だつて穿いたら中が見えないじゃないか！」

「オヤジの趣味なら他でやつてもらえませんか」

「……………この学校は色々之間違つてるような気がする。

「だがな、私はしつかりと風対策してるぞ」

と、自慢げに言う会長。しかし短パンやそういった類のものを禁止されてる中で、どうやつて対策するのだろうか？

なんとなく気になった俺は質問してみることにした。

「ちなみにどんな対策です？」

「聞いて驚け不知火くん——私は下着を着用していないのだ！故に下着は見えない——」

「うんその羞恥心のなさに驚いた」

訊いた俺が馬鹿だったぜ。

「これで校則上はセーフだ」

「法的にアウトですけどね」

こうして怒涛の「学園案内」は幕を閉じた。

ちなみに萩村はパンチラ対処でパンストを穿いているらしい。

女の子って色々大変なんだな。